学校通信 椙小 2月号 訂正版
2023（令和5）年 2月2日
椙山女学園大学附属小学校

ウェルビーイング

校長　相川保敏

１月１３日、文部科学省は来年度からの５年間の教育行政をいかに進めていくのかをまとめた「次期教育振興基本計画（以後：次期計画）」に関する中央教育審議会の審議結果を公表しました。次期計画の基本コンセプトは、二つで「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」です。

前者の「持続可能な社会の創り手」とは、学習指導要領にもみられる言葉で、将来の予測が困難な時代において、社会や世界の現状を自分との関わりから捉え、課題意識をもってその解決にあたるようにしていくこと、つまり主体的に社会の形成に参画し、持続的社会の発展に寄与することが求められています。これは、人間性を尊重し、人類の協調・連携を大事にする本学の教育理念「人間になろう」に通ずるもので、本校で継続してきた取り組みでもあります。

後者の「ウェルビーイング」は、英語で Well-being と表記します。現行の教育振興基本計画にはなく、次期計画に新たに導入されたものです。「幸福」という意味ですが、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、「Happiness」のような一時的な幸福だけでなく、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものとされています。さらに、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念であると記されています。

ここで注目する点は、この「ウェルビーイング」の前に「日本社会に根差した」という冠辞がついていることです。多様な個人それぞれの幸せや生きがいが異なるように、社会にもそれがあるという考え方です。現在、ウェルビーイングの国際的な比較調査において、自尊感情や自己効力感等が高い方が人生の幸福をもたらすとの考え方が優位になっています。こうした調査では、欧米に比べ日本の子どもの値の低さが問題にされ、どうやって高めていくのかが課題とされてきました。しかし、日本の社会では自尊感情や自己効力感を高めていくことが、ウェルビーイングに直結するのか、ということです。日本社会では、自己を主張し、自分が求めるものを獲得していく姿より、謙遜し、譲り合う姿を美徳とする文化が根付いています。つまり、自分の力で獲得していく幸福感だけでなく、人とのつながりや思いやり、利他性、社会貢献意識などが満たされる協調的な幸福感も大切にされています。こうしたことから、日本においては獲得的幸福と協調的幸福とのバランスを取り入れた「日本社会に根差した」ウェルビーイングを向上させていくことがコンセプトとされたわけです。

学校通信 10 月号でもご紹介した全国学力･学習状況調査を見ると本校の子どもたちは、

- 自分にはよいところがあると思いますか　＋ 5.4
- 人が困っているときは、進んで助けていますか　＋22.7

（値は全国平均との比較）

というように、自己肯定感は他の項目に比べて低いものの、思いやり、利他性は大変高くなっています。獲得的幸福よりも協調的幸福を感じる子どもが多い傾向にあると捉えられます。今後、協調的幸福感を維持しながら獲得的幸福感を高めていくために、まずは子どもたちを取り巻く「学校」や「家庭」が、子どもたちにとってウェルビーイングであるように努めていく必要があると考えます。ご協力お願いいたします。

（参考：次期教育振興基本計画の策定に向けたこれまでの審議経過について（報告）（案））